

令和4年度

小金井平和の日記念行事

# 「平和作文集」

小金井市

## はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界で唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から4編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていいただければ幸いです。

令和5年3月

企画財政部広報秘書課

# 目 次

○小金井平和の日記念行事作文コンクール

## 【入賞作文】

### 小学生の部 大賞

「平和をつなぐために」

由利 京志郎（東小学校 5年生）・・・・・・・・・・ 1

### 小学生の部 優秀賞

「命」

荒川 花弥（小金井第二小学校 5年生）・・・・・・・・・・ 3

### 中学生の部 大賞

「その日を信じて」

滝澤 あかり（東中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 5

### 中学生の部 優秀賞

「こころを奪うということ」

宮地 恵子（東中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 7

## 小学生の部 大賞

「平和をつなぐために」

由利 京志郎（東小学校 5年生）

日本は唯一の被爆国であるが、被爆者はもうとても少なくなっているらしい。そのうち被爆者が一人もいなくなってしまう。みんなが何もしないと、原爆の話をする人がいなくなる。そんなのいやだ。では僕たちは、どうすればいいのだろうか。僕は被爆者じゃないけれど、原爆がただの歴史で終わってしまうのは嫌だ。その気持ちは、たぶん被爆者と同じだ。

原爆を知るために何をすればよいいのだろうか。僕はこの夏休みに、原爆ドームと広島平和記念資料館に行った。原爆ドームは実際見ると、テレビで見て思っていたより、意外に小さく感じた。しかし建物が訴えかける大きさに、僕は圧倒された。原爆が起こったのだ。原爆があったのだ。そう訴えるような迫力があつた。原爆ドームを少し遠くから眺めた。周りは、新しい建物ばかりがずらりと並んでいる。そんな中、原爆ドームだけが白黒画像を合成したかのように、座っていた。ところどころ崩れ落ちながら。原爆の恐ろしさを物語っているようだった。

広島平和記念資料館では、たくさんの写真、絵、体験談が展示してあり、特に印象的だった写真が三つある。一つ目は、目の治療をしている人の写真だ。目は虚ろで、感情がわからない。まるで、偽物の目みただった。でも目をかっと開いて、こちらを見つめている。原爆におびえず平和に生きている僕に、何かを訴えようとしているかのように思えた。二つ目は、着物の柄が肌に焼き付いた人の写真だ。その人の顔は見えないが、すごく痛くて苦しい顔をしているのだろう。また火傷をしたところが膨らんでしまう、ケロイドというものがある。この資料館には、そんな体のいたるところがぷくぷくと腫れている人の写真もたくさんあり、原爆の恐ろしさに目を覆いたくなつた。三つ目は、石段が熱線で白くなり、人が座っていたところだけ黒いまま残った写真。「人影の石」というらしい。黒い部分にはくっきりと人が座っていた形が残っていた。その写真には、人は写っていなかったが、人がいるような面影だけが悲しい思いと共に残されてい

た。他にも、痛ましい絵や写真、悲しいストーリーの体験談がたくさんあり、町一つ破壊したこの原爆という凶器が、たくさんの人たちを苦しめたということを忘れてはいけないと思った。

また僕は、広島に行く前に戦争に関するテレビ番組を見たり、本を読んだりして準備した。それらの中には、当たり前のように含まれていた言葉がある。それは、「爆風」「被爆」「火傷」そんな言葉だった。こんなのが当たり前のように何回も出てきた。「こんな言葉が当たり前のように出てきていいわけない。」僕はそう思った。でも、調べた本や見たテレビにはもっと怖いところがたくさんあった。自分が逃げたいから、人を助ける余裕もなく逃げる。食べるものがないからお店のものを取って逃げる。今だったら、ありえないし、やろうと思う発想にいかない。しかし当時は、「自分がどうにかして生きなければ。」という思いが強くなる。そういう時だったのではないか。これはまさに、「ほたるの墓」みたいだと思った。「ほたるの墓」ではお兄ちゃんが、自分と妹の節子が生き残れるようにと思いながら、空襲のたびに人のものを勝手に盗っていく。そして誰もいないところで、狂ったみたいに高らかに笑ったのが、怖くて悲しかった。普通はそんなことやるだろうか。いや、しない。戦争は建物だけではなく、人の心を壊していく。多分そういうことだ。

僕はこの夏、たくさん戦争のことについて触れられたから、戦争のない大切さにあらためて気付かされた。しかし世界には、未だ戦争を続けている国もあるし、原爆を含めた核兵器を持っている国は九か国もあって、その国々が持つ一万三千発以上の核兵器が地球にある。たった一つの原爆で町一つを破壊したのに、こんなにもたくさんの核兵器がなぜ必要なのか。僕は、勘違いをしていたのかもしれない。この地球は平和だと。この核兵器、一万三千発を持っている地球を平和だと。

核兵器は恐ろしいものだ。これは、自分たちを守る道具ではない。世界を破壊する道具なのだ。だから原爆を使ってはいけないし、持ってはいけないということを決して忘れてはいけない。

## 小学生の部 優秀賞

「命」

荒川 花弥（小金井第二小学校 5年生）

今日も私は学校へ行く。それは、みんなにとっても私にとっても当たり前  
前の事。

今日も空は青い。それも、みんなにとっても私にとっても当たり前  
の事。

今日も思いっきり遊ぶ。それも、みんなにとっても私にとっても当たり前  
前の事。

今日も笑う。それも、みんなにとっても私にとっても当たり前前の事。

今日も生きている。当たり前前。

全部全部当たり前前。

家族がいて、「おはよう」と言ってもらえて、友達と遊べて、学べて、笑  
えて、ごはんも食べれて、ねれて、そんな毎日が当たり前前。

家があって、帰る所があって、お風呂に入れて、美味しい水が飲めて、  
生きられる。

全部、当たり前前。そう思っていた。

でも、当たり前前じゃないかもしれない。

何かちがっていたかもしれない。

少しちがっていたら、今日の空は赤かったかもしれない。

ばくだんがふってきたかもしれない。

学校に行けなかったかもしれない。

帰る場所がなかったかもしれない。

生きていなかったかもしれない。

毎日を平和にくらしているのも、当たり前前の事ではなかった。

昔の人は、「戦争」を見てきた。

戦争で、たくさんの人が死んだ。

たくさんの人が泣いた。

たくさんの人が家族を失い、家を失い、食料を失った。

今までは当たり前だった事が当たり前ではなくなったのだ。

でも、私は戦争を見ていない。だから、戦争をよく知らない。だけど、戦争が、とっても「こわいもの」という事は知っている。だから、私は戦争がきらい。今の楽しい生活を失いたくないから。自分の命をうばわれたくないから。

でも、人は争う事をやめない。「自分のため」なら、なんでもしていいと思う人がいるから。それは、いけない事だ。けれど、人はみんな、そういう部分がある。私にも、そういう部分がある。

ケンカはどうして起こるのか。それは、おたがいが相手の事をおもっていないから。それは分かっている。でも、どうしても、その時になると、自分のよくを出してしまう。それは、しょうがないのかもしれない。けれど、戦争と、ただの兄弟ゲンカやふうふゲンカはちがう。戦争は、人の命をうばうもの。人の人生をうばうもの。他のケンカとはわけがちがう。

私は、だれかに命をうばわれるかもしれないというきょうふを味わった事がない。だから、えらそうな口はきけないし、体験したように言う事もできない。でも、少なくとも私は、戦争で命を落としたくない。戦争で命を落とすという事は、だれかに命をうばわれるという事。会った事も、しゃべった事もない人に命をうばわれるという事は、すごくつらいと思う。自分は何もしていないのに、いきなり命をうばわれる。命をうばう方も、つらいと思う。私はそんな人生の終わり方はいやだ。自分の命なのに、他人にうばわれるなんていやだ。命は返ってこない。それで、どれだけの人が悲しんだか。

戦争をなくしたい。戦争をなくすには、みんなが命の大切さを知っていたらいいと思う。そしたらきっと、戦争はなくなるはず。

やっぱり平和が一番。

やっぱり命が一番。

## 中学生の部 大賞

「その日を信じて」

滝澤 あかり（東中学校 3年生）

二月、ロシア軍によるウクライナへの侵攻が始まった。半年以上が過ぎても今もなお続く両国間の戦いにより、多くの犠牲者が出ている。テレビのニュースで映し出される映像はとても悲惨な状態で、私は四年前に会った大城さんの話を思い出した。

私の父は高校の教員で、私が産まれるよりも随分前、沖縄の学校に赴任していた。東京に戻ってきた今でも沖縄には思い入れがあるようで、私が幼い頃から度々家族旅行で沖縄を訪れ、私達家族に沖縄の素晴らしさを教えてくれる。青緑色で透き通った海に美味しい料理、そして沖縄と言えばアメリカ軍の基地や沖縄戦による様々な爪痕。父は沖縄に残る数々の課題も私に教えてくれていた。最後に家族で訪れた四年前。沖縄戦終焉の地である平和祈念公園を見学した日の夜に大城さんと夕食を共にした。沖縄の学校で父の同僚だった大城先生は、いわゆる沖縄戦生存者の息子さんだ。私がその夜大城さんから聞いた話は、これまでテレビや本で知ったどの戦争話よりも衝撃的なものだった。

沖縄は今から七十七年前、日本軍とアメリカ軍の戦争が行われた地で、元々はアメリカ軍による本土侵攻を防ぐために犠牲になった場所だそう。勝つためではなく、アメリカ軍を本土に行かせないよう時間稼ぎに利用され、民間人が多く駆り出されて戦争は長期化し、犠牲者もかなり多かったらしい。沖縄戦はある日突然、海上をアメリカ軍の真っ黒な戦艦が埋め尽くして始まったそうで、その恐怖は計り知れない。その中で日本軍は民間人に対して、アメリカ軍は残酷であると恐怖心を植えつけ、アメリカ軍に捕まる位なら自死の道を選ぶよう誘導されていて、実際に戦死者だけではなく、集団自死により自ら命を絶った人達や身内に殺された子ども達も多かったそう。大城さんのお父さんも集団自死により家族を亡くし、自らも殺されそうになったところを親戚の方に助けられたそう。あちらこちらで知り合いが命を絶つ瞬間を目の当たりにし、周辺には遺体がゴロ



ゴロと転がっている中で一夜を過ごし、生き残った後も悪夢にうなされ続けたそうだ。大城さん自身も子供の頃にお父さんから戦争の話を書くことはなく、「恐らく、戦後何年たっても思い出したくない出来事だったのだろうな。」と言っていた。少しずつ戦争の経験者が減る中で、もう二度と同じ悲劇を繰り返さないようにと、大城さんが大人になってから話をしてくれたそうだ。

「あかりちゃん達、東京の人達にも知ってほしいな。」

大城さんは泡盛をぐいっと飲み干しながら、そう言った。当時、私は小学生だったが、大城さんの話があまりに衝撃的で身震いしたことを覚えている。

戦争って何なんだろう。平和って何だろう。平和という言葉調べてみると「戦争や暴力で社会が乱れないこと」とある。私は生まれてから一度も自分が戦争に巻き込まれるかもだなんて考えたことがない。毎日、学校で友達と学び、楽しくおしゃべりをして、家に帰れば美味しいご飯があり、温かい布団で眠る。ロシア軍の侵攻により、日本も攻められたらどうしようとか、北朝鮮のミサイルが飛んできたら怖いとか最近の世界情勢で恐怖を感じることはあるけれど、どこか他人事で現実味がない。今の毎日が当たり前の日常なのだ。これを平和と呼ぶのだろう。日本は戦争をしないと憲法で定められている。その安心感も手伝って、私達は戦争の恐ろしさや残酷さを忘れかけているのかもしれない。大城さんのお父さんが言う通り、戦争の時代を生き抜いた人達がどんどん減り、私達が彼らの経験談を聞ける機会も減っている。これからの日本を担う私達若者が、もっと積極的に戦争について学び、平和について考えることがとても大切だと思う。

同じ地球上には今日も、戦争によって命を落とし、大切な人やものと悲しい別れを経験している人達がいるだろう。世界中の子ども達が武器の使い方や戦い方を学ぶのではなく、平和について学び、心から安心して暮らせる世の中であってほしい。世界を変えることは難しいかもしれない。でも、私達が平和な国日本を守り続けることで、何か大きなものを変えられる日が来るかもしれない。その日を信じて、できることから始めてみよう。

## 中学生の部 優秀賞

「こころを奪うということ」

宮地 恵子（東中学校 3年生）

二〇〇七年七月一日。私は、“被爆地・ヒロシマ”で誕生しました。今の日本で、広島に原爆が投下された日、その時間を正しく答えられる人はどのくらいいるのでしょうか。「こころを奪うこと」は一体どんなことか、考えられる人はどのくらいいるのでしょうか。

私には、一生忘れられない思い出があります。まだ広島に住んでいた頃、家族で原爆資料館に行きました。正直に言ってしまうと、目を背けたくて、何も考えたくなくて、恐ろしい空間でした。私は、ずっと記憶から消えることのない景色を見ました。焼けただれた皮膚、ぼろぼろになった髪、痛みを和らげるために両腕を前に伸ばす様子。それは三体の被爆人形です。思い返しても、私には三人が人形には感じられませんでした。「助けて」と私に言っているように聞こえました。私の喉が熱くなっていき、水が飲みたいと思ったことを、今でも覚えています。しかし、次第に心の中で、母にしがみついて目をつむりたいという気持ちとは対照的に、“絶対に目を背けてはいけない”という思いが現れてきました。夢でも物語でもなく、実際に起きたことなのだとということ、**「怖い」ともとれる**様子が、私に教えてくれたのです。

東京に引っ越してきてからも、戦争に関する本を読んだり、地域のホールで開催された映画鑑賞会に参加したりして、まずは戦争ということの知識をつけました。歳を重ねるごとに、理解できる内容も増えていきました。戦争に至った経緯や、なぜ広島や長崎に原爆が投下されたのかなど、調べれば調べるほど、**「人間とはなにか」**ということを考えさせられました。それほどに、恐ろしい内容です。

私なりに考えを深めた結果、戦争は**「こころを奪うこと」**という結論に至りました。

“こころ”とひとくくりに言っても、これは様々な意味を持っていると思います。

まず、命を奪うこと。正確な死者数はまだ分かっていませんが、現時点で少なくとも二十万人の方々が原爆によって亡くなっています。次に、感情を奪うこと。人間は自らの手で人を死なせてしまうために生まれてきたわけではありません。人間らしい感情を、戦争は奪ってしまいます。「戦争をしてはいけない」と言い、それ以上を考えようとしなければ、いとも簡単にそのころは奪われてしまいます。大切なのは、自らの考えをもつこと。戦争になびかない、揺るぎない信念をもつことなのではないでしょうか。

私達は、「ころを奪うこと」に対抗し続け、二度と同じことを起こさないために、風化させず、自らの考えをもちます。そして、世界の平和を祈り続け、行動に移していきます。

## 平和作文集

発 行 令和5年3月11日  
小金井市

編 集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係  
小金井市本町六丁目6番3号  
☎ 042-387-9818

再生紙を使用しています。